

第9章 これから大学で勉強する人達へ — ひとつの私論として —

「大学に居場所がありません」

「大学で何をしたらいいのかわからないんです」

「私、友達ができないんですが…」

以上はだいたい大学に入学した学生が5月頃に相談にくる悩みのベスト3です。

これに対しては「居場所がないのなら、つくればいいじゃないか」とか「何をしたらわからないとは情けない！勉強しなさい！」とか「友達ができないのなら、積極的に話しかけなさい」というアドバイスが普通なされます。そして相談してきた学生も釈然としないまま「そんなものかなあ〜」と思いながら部屋をでていき、「そんなものかなあ〜」と思いながら4年間を暮らしてしまいます。またなかには「僕の求めていたのはこんな暮らしじゃない！」とってせつかく入った大学を辞めてしまうこともあります。これは大変に悲しいことだといえましょう。

実は上の三つの悩みはすべてたった一つの「勘違い」から生まれています。あることについて間違った認識を行ってしまっているためにおきるパニックのようなものといえます。この「勘違い」さえ理解できれば、上の悩みなんか簡単に解決してしまうことなのです。

本稿の目的はその「勘違い」について順を追って説明していき、最後に「では大学では何が手にいれられるのか」ということについて書こうと思います。

1. 私達が高校までに学んだこと

はじめに“大学”というものについて考える前に、私達がすごしてきた小中高で「何を学んできたのか」ということについて考えてみましょう。

まずは次の問題を解いてみてください。

- 1) 鎌倉幕府が開かれたのは何年？
- 2) 進化論を唱えたのは？
- 3) $Y=3X^3-4X^2+5X+2$ を微分した値は？

いかがでしょうか。1)はもちろん「イイクニ(1192年)作ろう鎌倉幕府」です。2)は当然にダーウィン。3)は $Y'=9X^2-8X+5$ となるはずです。おそらく多くの人達が簡単に解いてしまったことと思います。

そこでもう一つだけ問題です。

- 4)で、それがあなたと何の関係があるのですか？

今度はどうでしょうか。言いかえるならば「鎌倉幕府が1300年に作られたとして何かあなたの生活に影響がありますか」「進化論を唱えたのがニュートンだったとしても何かあなたに不都合がありますか」と聞いているのです。

もちろん「NO」です。鎌倉幕府が何年に開かれようが、私の朝御飯がまずくなることはありませんし、寝付きが悪くなることもありません。同様にニュートンが進化論を唱えてしまってもリンゴはやっぱり上から下に落ちますし、私の先祖はやはり類人猿系であることは間違いありません。

すなわち“まったく関係ない”のです。

我々は小学校の6年間、中学校の3年間、高校の3年間を実は“自分とはあまり関係のないもの”をひたすら憶えていくことに費やしてきたのです。

しかしこれらの知識はこの期間とても重要なものでありました。なぜならこれらの知識を完全に持っていなければ試験には受からなかったからです。自分の生活に関係があろうとなかろうとこれらの知識は無理にでも頭に詰め込んでおかなければ試験では×となってしまうからです。こうして私達は「泣くよ(794年)ウグイス 平安京」だの「 $\sqrt{2}$ をヒトヨヒトヨデヒトミゴロ(1.14141356...)」などとわけのわからないことを口走りつつ試験をくぐりぬけてきたのです。

ただ勘違いしないでいただきたいのは、私はここで「だから詰め込み教育はいかん」とかいうつもりは全くありません。むしろ小中高で学ぶことは普通に考えられている以上にものすごく大切なことだと思いますし、それがあってこそその大学での勉強、社会生活、もっというと国民全体の資質の形成だといえます。

「少しでも多くの知識を学んでもらいたい。そしてそれをこれから出ていく社会で役立ててほしい。そのためには少しでも効率的なシステムを作っていこう。」

こうした思いが小中高で「クラス」という単位をつくり、一日のうち継続的に5時間なり6時間なり継続して、理科とか社会とかの知識をインプットできるようなしくみを作りあげたわけです。そして我々はその「クラス」のなかで自分の「席」を持ち、毎日顔をあわせるクラスメートを仲間として暮らしてきたのです。あるいは多少照れながらいうならば、学校での勉強もさることながら、このクラスの友人達との関係から学んだことも重要だったような気がします…

いずれにしても我々が小中高でしてきたことは「社会にでていくのに必要だと思われる共通の知識を大量にインプットすること」であり、それを効率的に行うために“クラス”が作られ、そこに自ずと自分の居場所を作ることができたということなのです。だからそのなかには先にみたような三つの悩みはほとんど起きなかったわけです。

2. 大学での孤独

では大学ではどんな暮らしが待っているのでしょうか。

悲しい話ですが、あなたの所属するクラスなどはありません。あったとしても便宜的に1週間に1時間か2時間程度です。当然あなたの席もありません。あなた一人に席を占領されては困ります。あなたが遅刻したとします。誰もあなたを責めません。廊下に立たされたり、反省文を書かされることもありません。ではクラス対抗の運動会は？そんなものはありません。運動したければどこか他でやってください。学校で騒がれては迷惑です。非行に走る？今時はやりませんが…勝手に走ってください。誰もあなたのことなど見向きもしません。

そう大学では“誰もあなたに見向きもしない”のです。それが当然ですし、大学というところはそうでなければ困るのです。あなたは大学では孤独であるのが本来の姿なのです。

その理由を説明していきましょう。

我々は前のページで小中高で何をしてきたかということを考えてみました。そこでは「できる限り多くの知識をインプットすること」が求められていました。好むと好まざるとにかかわらず、頭の中に様々な知識を詰め込まねばなりません。微分、積分、元素記号、歴史年表など…

でもその傍らでフツと立ち止まって考えたことはなかったでしょうか。「空は何で青いのかなあ」とか「なんとか金持ちになる方法はないのかなあ」「俺の先祖はどんな奴だったのかなあ」「イギリスに行ってみたいけどどんな国なのかなあ」といった、心の中に一瞬現れては「まあいいか。明日の予習もあるし…」といった日常に消されていった疑問についてを。

実は大学の勉強とはそこから始まります。

あなたがもし「将来大金持ちになりたい」という野望を持ったとします。そうしたらあなたは「大金持ちになる方法」を探さなくてはなりません。株、土地投資、貿易、ベンチャービジネスなどなど…方法は無限

にあります。あなたはそこから最も有望そうな手段を選びます。例えばあなたが“株”を選んだとするならば、次には株の投資のイロハを知らなくてははいけません。そこであなたは注文の仕方にも「成り行き」と「指値」があることを知るでしょうし、株価チャートの見方を習得する必要に迫られるかもしれません。また値上がりしそうな株を知るためには今後の日本経済の動向を知らなくてはなりません。

「どの産業が今後伸びそうなのか」「どの産業が斜陽なのか」「そこに何か法則性はあるのか、ないのか」知る必要のあることは無限に広がっていきます。

またあなたがもし歴史に興味があり、「1192年 鎌倉幕府成立」ということをもう少し知りたいとします。そしてもしあなたが「平家物語」に出会ったならば、そこに流れる歴史の栄枯盛衰のなかで精一杯個性を出しきってその時代を生きた人達と出会うことでしょう。中国との貿易を中心とした新しい日本を作ろうという壮大なプロジェクトに挑んだ平清盛。中央から阻害されつづけた関東武士団の悲願。京都を占領したものの何がなにやらわからないうちに追討されてしまった木曾義仲の悲劇。壇ノ浦で「海の底にも都があります」といって幼い天皇を抱えて入水した平時子。様々な人達の様々な想いが織りなされて歴史が作られていくことが理解されるはずです。年表がたった一行しか書かない「1192年 鎌倉幕府成立」のその背後にあるものに慄然とすることでしょう。

またもしあなたが進化論に興味を持ち、少しでもそれ関係の本を読まれたとするならば、ダーウィンのいう適者生存の法則が生物学の領域を越えて現在の経済現象にまで影響を及ぼしていることに驚かれることでしょう。ダーウィンのいう「適者生存の法則」とは一言でいえば「その環境に最も適したものが生き残り進化の役割を担う。そうでない種は死滅していく」というものでした。ではこの考え方は現代社会にもあてはまるのでしょうか。「弱い企業が倒産することや能力のない人が解雇されるのは当然だし、そうしなければ経済は発展(進化)しない」という考え方のもとに自由競争が現在産業界で行われ、吸収合併・リストラが進められています。しかしその一方では生物界と社会は違うという考え方もできています。

少し話がわき道にそれました。要はこう言いたいのです。すなわち「大学とは自分が抱えている問題を解くところである」ということです。その疑問はどんなことだっていいのです。“ぬいぐるみ”が好きならば「ぬいぐるみの歴史」も立派な研究になります。「紙芝居」について深く調べていけば、それを通してその時代時代の日本人の文化、考え方がうかがえるはずです。「私は死んだらどうなってしまうんだろう?」という原初的な恐怖や疑問を持っているならば、チベット仏教について勉強してもいいし、幽霊について研究しても面白いでしょう。あるいはネイティブ・アメリカンに興味があるのであれば、ある程度大学で勉強したうえで、その社会に飛び込んでいけばいいわけです。

何でもいいのです。人が自分の知りたいことを誰かにとやかくいわれる筋合いはないのです。日本経済が高尚で“お金持ちになる方法”がランクが下ということは絶対にはないのです。自分の知りたいことを、自分の好きなように調べていけばいいのです。大学はそのために存在しています。様々な疑問を抱えて、それを解決していこうとするひとのためになるように大学は全力をあげているのです。

これは言い換えれば「何の問題もなければ、大学に来る意味がない」ということになります。

高校までの授業の目的は「知識をより多くインプットすること」でした。この場合には疑問はあまりもない方がいいかもしれない。いちいち習ったことを疑問に思っていたら多くの知識のインプットができなくなってしまいます。

しかし大学での目的はむしろその逆です。「疑問を持つこと」なのです。できるだけ多く、できるだけユニークな疑問を持つことなのです。大学での勉強はここから始まるといえましょう。

それゆえ、この場合、最も大切なことは「自分は何を知りたいのか」という自分への問いかけです。それが明確になっていない限りは「大学で何をやっていいのかわからない」ということになってしまいます。大学では学生の持つ多様な疑問に対応できるように図書館には何万冊もの本を用意し、無数のコン

コンピュータを並べ、たくさんの講義やゼミを準備して待っているのに、「で、私は何をしましょうか？」ではどうにもなりません。

そしてこの「自分は何を知りたいのか」という自分への問いかけは、友達がいたからどうにかなるというものではありません。友達に「俺は何を知りたいのかなあ」と聞いたところで、決してわかるわけがないのです。いや、“自分で自分の求めるモノを明確にしていく”という孤独な作業には、むしろ友達はいない方がいいのかもしれない。

勘違いしないでいただきたいのは、私は決して「大学では友達も作らずにひたすら勉強しなさい」などと言っているのではないのです。そうではなくて「自分が求めているものをあいまいにしたままで“何か”を友達に求めるというのはやめましょう」といっているのです。この意味が理解できますでしょうか。そうだとすれば先ほどの「大学で友達ができない」という悩みはまったく見当違いといえます。友達ができるかどうかということは大学というものとは別個の、ひたすらは本人のパーソナリティーに属する問題といえましょう。

そして各自が求めているものはみんな違います。歴史に興味のある人、哲学に興味のある人、スペイン語を話したい人、芥川龍之介を読みたい人、様々です。それを高校みたいに一つのクラスにまとめるなんていうことは不可能です。千差万別の興味を持った人達が自分の興味あるものを調べに図書館に寄り、少しでも自分の興味あるテーマの参考になればと講義を聴きにくるわけです。みんなが自分の興味のあることだけを聞き、そうでない話は聞かずに帰ってしまうわけですから、高校みたいなクラス編成などできるわけもなく、自分の席など存在しません。だから「自分の居場所がない」のは当然なのです。それは例えていえば映画やコンサートを聞きにいった「私の居場所がない」と騒いでいるのと同じことなのです。そしてそれが正常な大学の姿なのです。

ここでやっとはじめに掲げた「勘違い」について説明が可能になります。すなわち文頭に掲げたすべての悩みは「大学を高校の延長、すなわち何かを誰かに教えてもらうところ」と認識してしまっていることにすべての原因があるのです。

大学はみなさんを一つのクラスに押し込んで無理やりに勉強させるようなシステムは持っていませんし、友情やら愛情を育てていただくことを主たる目的にしているわけでもないのです。大学が持っている唯一のシステムは「疑問を持ってその門を叩く者にその解答なり、ヒントなりを与える」というものだけです。それゆえ何らの疑問や問題を持たない人に対しては、大学が「何をしたいかわからない」「居場所がない」無味乾燥なところになってしまうのは当然のことといえましょう。

これは逆にいうならば、「あなたが何らかの疑問を持って大学にくるのであれば、大学はその全力をあげてあなたの疑問に答えるであろう」ということでもあるのです。そして同時に「あなたが真剣に自分の抱えた疑問に取り組もうとするならば、その問題を語り合える人達が必ずいるはずである」ということも意味しているのです。

3. 疑問の持ち方—そして研究の仕方についての私論—

では「どうすれば疑問が持てるのか？」ということを次に考えてみましょう。

結論から言わせていただくならば「無理はしない」ということでしょうか。せっかく大学に入ったのですから、何か高度な知識を身につけたい、日本や世界の行く末についてじっくり考えてみたいという人も多くいることと思います。

まあ、それはそれで立派なことではあるのですが…どうでしょう…？…難しいところです。

つまり私はこう言いたいのです。「自分とあまりにもかけ離れたところよりも自分と関係のあるところ、自分が本当に興味を持つものをテーマに選んだ方が楽しいのではないだろうか」ということなのです。

ある事例を出してお話します。これは私の大学時代の話です。ある日クラスの先生が「日本経済に

ついて何でもいいからレポートしてきなさい」という宿題をだしました。テーマの設定自体かなりいいかげんでしたが、提出されたレポートの結果は実に興味深いものがありました。いわゆる“秀才”とか“まじめ”と称されている人達を書いたレポートは「戦後日本経済の軌跡」とか「アメリカ財政赤字の日本に与える影響について」とかいったものでした。もちろん“秀才”の書くものですからその内容にソツはありません。しっかりと“何冊かの本から重要なポイントを抜き出してきっちりとまとめて”ありました。

これに対して、あまり“まじめ”とは言われたことのない学生が書いたものには変なものが多くありました。「亀豆腐再建計画」「よい銭湯の条件」「なぜみんなビトンのバックが好きなのか？」等々です。一番目の「亀豆腐再建計画」とは実家が亀豆腐という豆腐屋を営んでいて将来はそこを継がなくては行けないという切実な状況にある学生のレポートでした。彼は、実家の売上げが年々減少していることから、このままでは嫁がもらえないかもしれないという不安、そして銀行に就職したいのだがどこも採ってくれなかったというどうでもいような問題意識から、21世紀に豆腐屋が生き残っていくための方法を模索するという意欲的な試みをしてみたわけです。結論として彼はインターネットによる豆腐の販売というところに至るわけですが、数年前という時代を考えるとかなり画期的なことであろうと思われる。

さてここで私が重視したいのは「どっちが本当に楽しかったらうか」ということです。もっと深いところでいうならば「自分のために勉強をしていたのはどちらか」ということです。たしかに「アメリカの財政赤字」も重要でしょう。しかしそれを書いた学生はアメリカに行ったことはありませんし、アメリカに興味もありませんでした。ただレポートのテーマとしてふさわしいだろうということから選んだにすぎません。そしてその結論も多くの学者やコメンテーターが書いていることの抜粋にすぎません。だとしたらこの学生は単に色々な文献を切り貼りしたにすぎません。はたしてそんな作業が楽しかったのでしょうかということなのです。

これに対して亀豆腐の方は「このままでは嫁がもらえない。何とかしなくては！」という明確な問題がありました。そして彼が勉強し、調査を進めるときにも「俺はどうしたらいいのか」という問題を中心においていたものといえます。おそらく彼は楽しかったらうと思います。彼は「大学において、自分で疑問を持ち自分でその解答を探していく」という楽しさを知ることができたのだと思います。

というようなことを考えた場合、「アメリカの財政赤字」も「日本経済の軌跡」も勉強することは重要であるけれども、そこに“自分”というものがなければ意味がないのではないらうかと思えてくるのです。

これが「俺は大金持ちになりたい。その方法を知りたい」という野望を持って、「どうもアメリカの財政赤字が増えると円高になる傾向があるようだ」ということを考えたとします。その上でアメリカの財政赤字問題に取り組むというのであれば、“自分”というものがそこに存在しています。「アメリカの財政赤字」という問題が実際にそこに存在し、実際に自分と結びついているわけです。そしてそうであるかぎり、研究することは楽しみでありましょう。

個人の価値観において「アメリカの財政赤字が上等で、亀豆腐のランクが下」などということはありません。誰も個人の価値観に文句はつけられないのです。そして“大金持ちになりたいという野望”は自ずと“将来のわが国の経済の姿”を学ばずにはいられなくなります。「亀豆腐再建計画」はインターネットによるEコマースへとつながっていきました。

だとしたら大切なことは、本当に自分が疑問に思っていること、知りたいと思ったことを素直に認め、その疑問を大切にして、そこから研究をはじめていくことなのではないでしょうか。そうしていった方が、同じところに辿りつくにしても楽しいのではないかと思えるのですが、どうでしょうか。